

続有恒教授を偲ぶ

依 田 新

9月25日（昭和47年）夕方帰宅した時に、家人から国立教育研究所の木村さんからの電話で、続教授がなくなられたという知らせがあったと聞き、あまりにも思いがけないことに、ただ愕然とするばかりでありました。すぐに諸方に問い合わせ、その情報が明らかになるにともない、その毅然たる御逝去の事実と直面し、こみあげてくる悲しみに堪えず、しばし茫然と受話器の前にうずくまるのみでありました。たまたま抜けることのできない公務のために、最後のお別れにかけつけることもできず、そのことが未だに心残りであります。思えば、9月9日の教育心理学会の常任理事会でお会いしたのが最後となりました。

続さんは、この常任理事会には遠路にかかわらず毎回御出席下さり、教育心理は会の運営に誠意をもって御助力下さいました。続さんのアイデアによって学会運営に新機軸をもたらされたことも少なくありません。当時の理事長としてここに深く感謝するとともに、お忙しい日常のお仕事の上にさらに常任理事としての御負担をおかけしたことも御健康に障ったことの一つではなかったかと、深くお詫び申上げる次第であります。

昭和25年、私が名古屋大学に赴任いたしました時、故正木正教授の御推せんによって、当時東北大学におられた続教授を名古屋大学にお迎えすることができましたが、それによって教育心理科は充実した陣容をととのえることができ、研究室はきわめて活気にみちたものとなったのであります。続教授を中心とした研究室の全員が一つの共同研究（家族関係と人格形成）に打ちこんだ当時を、今思い出し感慨深いものがあります。

続教授の御急逝は名古屋大学教育学部にとって医すことのできない大きな傷手ではありますが、同時に、日本の心理学、とくに教育心理学の世界にとっても大きな損失であると言えます。続教授は心理学の研究法について早くから緻密な考察を展開され、多くの貴重な論文を発表されるとともに、独自の構想のもとに教育臨床研究所および心理学情報センターをほとんど独力で設立されるなど、研究と実践とに文字通りその情熱を傾けられました。

続教授のそのひたむきな研究心と実行力とに私どもは常に感服いたしておりましたが、そのお姿をもはや研究室に見ることができず、また日本の心理学界に対する教授の苦言や批判の声を聞くことができなくなったことは、わが国の心理学界にとってもまことに残念なことであります。

今日、私どもは教授の遺された志をついでわが国の心理学の進歩のためにいっそう努力することを御霊前に誓って追悼のことばといたします。

以上は学部葬の時に読んだものでありますが、その晩の追悼アーベントでも続さんの思い出をしゃべりましたので、そのことを付け加えさせていただきます。

私が名古屋大学で続さんと一緒に暮したのは僅か3年余に過ぎませんが、その間が私にとってもっとも楽しい時であったように思います。続さんは非常に勉強家であるとともにお酒もお好きで、当時私は単身で名古屋に下宿生活をしておりましたので私の方から続さんをお誘いすることが多かったことと思いますが、よく栄町のあるバーで御一緒に飲んだものです。そのころは続さんは酔うと必らず美しい声をきかせて下さいました。ヴォルガの船唄などは絶品と言うべきでしょう。

そのころ名古屋大学には統計学の白石一誠教授がおられ、白石さんも下宿生活だったのでわれわれの飲み仲間の一入でした。続さんや白石さんと夜おそくまで飲んで騒いだことは私の名古屋における懐しい思い出であります。今や白石さんも続さんもなくなられて寂しい極みであります。

続さんは、第一法規から出された「教育評価」という本の序文で、自分はある時期まで「教育に関係する仕事は避けたい」と思っいられたのが、国立教育研究所で城戸先生のもとで仕事をするようになってから、だんだん教育とのかかわりを持つようになって行ったということを書かれておりますが、私も似たような経路を辿っておりますので共感を感じました。最近では、続さんの方が私よりもより深く教育の問題にかかわっていられると言っよいでしょう。

続さんは学問に対しても、生活に対しても、非常にきびしい方だったと思います。だから、師弟の間柄における礼儀作法などについても、かなりやかましいところがあり、学生や助手などをこわがらせていた面もあったのではないのでしょうか。同時に、続さんは権威に阿ったり、甘えたりすることを非常に嫌われ、わが道を行く一匹狼の態度をくずされませんでした。かつて正木さんが続さんを推せんされたとき、私に「彼は非常にすぐれた人だが、一寸気むずかしいところがあるから」ということを言われたことがあります。それはこのような自他に対するきびしさを言われたのだと思います。

続さんは、正木正選集第3巻のあとがきに、正木さん

の思い出を書いています。その中に、続さんの司会で、城戸先生、正木さん、それに私とで「教育心理学のあり方について」という座談会（昭和30年）をしたときの話に触れ、続さん一流の評価をされているのであります。それによると、城戸先生の教育心理学は文部大臣

の教育心理学、正木さんのそれは正木村塾の教育心理学、依田のは隣の小父さんの教育心理学だというように書かれております。それで私はこれに加えて続さんの教育心理学は裁判官の教育心理学だと言ってみようかと思いますが如何でしょうか。